放射線災害・医科学研究拠点

第６回ふくしま県民公開大学の開催報告

【はじめに】

ふくしま県民公開大学は、「放射線災害・医科学研究拠点」事業の一環として、平成 28 年度から開催してきました。

共同研究の成果発表や学生によるディスカッション、食や子育てといった身近なテーマ等様々な内容を通し県民の皆様に情報を発信しています。

令和３年度は、令和２年度同様、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、従来の集合開催方式ではなく、福島テレビによる、全４回シリーズのテレビ番組として放送する形で開催し、拠点事業の研究成果等について、広く情報発信しました。

今回の公開大学では、次の４名にご講演いただきました。

（１）第１回（３月４日（金））

講　師：公益財団法人ときわ会常磐病院
澤野豊明先生

テーマ：「原発事故後に行われた緊急病院避難の健康影響」

（２）第２回（３月 11 日（金））

講　師：福島県立医科大学放射線健康管理学講座
伊東尚美助手

テーマ：「相馬井戸端長屋の取り組み」

（３）第３回（３月 18 日（金））

講　師：福島県立医科大学疫学講座
長尾匡則助教

テーマ：「震災後、肥満を予防した活動」

（４）第４回（３月 25 日（金））

講　師：福島県立医科大学国際被ばく保健看護学講座
佐藤美佳教授

テーマ：「おかえりなさいを支える「ふたば暮らしの保健室」」

【第１回放送】常磐病院　澤野豊明先生

放射線災害・医科学研究拠点共同利用・共同研究の成果として「原発事故後に行われた緊急病院避難の健康影響」についてお話をいただきました。

＜講演内容＞

福島第一原発事故直後に「双葉病院で多くの患者が亡くなった」という報道が世間を騒がせたことは今でも記憶に残っている方が多いと思いま

す。私もその１人でした。しかし、原発事故時の緊急病院避難については具体的な学術的に行われた研究はほとんどなかったことから、浜通りで働く自分たちが後世のために残さなければならない仕事（研究）であると感じたことがこの研究を始めたきっかけです。

福島第一原発事故後に、事実上 30 キロ圏内の全ての病院や老人介護施設に避難を強いられ、それぞれの医療施設で混乱の中で避難が行われました。その結果、いくつかの病院では、放射線被ばくとは直接関係のないところで、避難に関連して元々状態の悪い患者さんが亡くなりました。本研究では、災害時の施設ごとの困難と患者さんが亡くなった状況を詳しくまとめました。避難がスムースに行われた病院ですら亡くなった方がいた他、ひどい混乱の中で避難がスムースに行かなかった病院では、特に重症患者への十分なケアが行き届かなかったことが、一部入院患者の死亡につながったものと考えられました。

【第２回放送】放射線健康管理学講座

伊東尚美助手

「相馬井戸端長屋の取り組み」と題して講演を行いました。

＜講演内容＞

相馬市では保健師として災害公営住宅の相馬井戸端長屋（以下、長屋）の健康支援に携わっています。3 世代同居が当たり前の地域で、震災をきっかけに初めて家族と離れて一人暮らしをはじめた高齢者が一定数いると知ったことに興味を持ちました。震災で家を失い、家族とも離れた独居高齢者を長屋が受け入れていました。家族同居でなくても「認知症であっても周囲のインフォーマルなサポートと公的な介護サービスを利用して自立生活」ができている方や、「日頃から助け合いが容易にできる環境により急変時本人が望む医療へアクセスでき孤独死を防げた」方がいることは長屋の効果を示す事例であると海外のジャーナルに論文として発表してきました。

災害公営住宅として始まった相馬市の事業について、入居者やステークホルダーへのインタビューを実施しました。インビュー結果から、長屋の特長として「ソーシャルキャピタルの再構築」「住み慣れた地域で最後まで暮らすことを可能にする」「高齢者や障がい者の地域での自立生活を可能にする」「社会的弱者への社会保障」といった諸点が明らかになりました。

【第３回放送】　疫学講座　長尾匡則助教

「震災後、肥満を予防した活動」と題して講演を行いました。

＜講演内容＞

地域の皆様の、日々の暮らしや経験から健康づくりのヒントを見つけ出し、そのヒントをどうすればできるだけ多くの方々の生活に取り入れられるかを一緒に考えています。具体的には、（１）データを解析して病気に関連する生活習慣等を見つけ出す（エビデンスの創出）、（２）それを地域の健康増進施策に組み込む（集団レベルでのアプローチ）、（３）住民お一人お一人とお話しをしながら、その方にとって少しでも健康的な生活をするには何ができそうかを一緒に考える（個人レベルでのアプローチ）、という活動です。地域の皆様の経験から学ばせて頂いたヒントを、より多くの県民の皆様と共有することで、今よりももっと多くの人が健康でいられることを目指しています。

今回紹介する内容は、数万人分の調査データを解析した結果です。震災後にどのような生活をされていた方が、生活習慣病になったり、逆にならなかったりしたのかを調べたところ、太っている方は高血圧や糖尿病など、様々な生活習慣病になりやすいことがわかりました。しかし一方でレクリエーション活動や地区の仕事などで地域と関わりのある男性では、肥満になりにくかったことも明らかになりました。（なお、この検討は全体だけでなく各市町村ごとにも行っており、その市町村で実際に生活習慣病になりやすかった原因や、なりにくくした要因について調べ、”各市町村での保健事業に活かして頂けるように連携（各市町村に報告書を提出・説明会を実施し、必要に応じて追加の解析等に応じていること）” しています。）

この解析結果より、地域やご近所さんとの関わりを強くするような取り組みを増やすことにより、肥満が減って、ひいては糖尿病などの生活習慣病の予防に繋げられるかもしれません。ただし解析で明らかになった事実が、そのまますぐ地域の健康づくりに組み込めるわけではなく、また実際に生活の中に取り入れることも簡単ではありません。ゆえにデータの解析だけではなく、自治体の保健行政担当者との懇談や、住民の方との健康相談にも取り組んでいます。

【第４回放送】国際被ばく保健看護学講座

佐藤美佳教授

「おかえりなさいを支える「ふたば暮らしの保健室」」と題して講演を行いました。

＜講演内容＞

原発事故により帰還困難区域が指定されましたが、令和４年６月以降に特定復興再生拠点区域全域の避難指示が解除される予定となり、双葉町の町民も、ようやく帰還できることとなりました。しかし、双葉町の医療施設はまだ開設されていないため、帰還した町民の健康の保持増進を図り、また地域コミュニティの再生を図る必要があると考えました。そこで、高齢者等の健康・生きがいづくりのために、健康相談や見守り活動などの拠点となる場所を作りたいと思いました。令和４年１月 20 日から双葉町民の準備宿泊が開始されることに伴い、双葉町役場コミュニティーセンター連絡所内に、「ふたば暮らしの保健室」を開設します。毎週木曜日の 10 時～ 16 時にオープンします。主に、健康相談や悩み相談が中心となりますが、血圧測定や血中酸素飽和度測定なども行います。また、家庭訪問も随時行います。月に１度、健康体操教室やおしゃべり会、レクリエーションなどプチイベントを企画します。双葉町民の生活や健康に関する不安の軽減と健康増進のために役立つことができると思います。

【番組放送後】

番組放送終了後、放送当日にリアルタイムでご覧いただくことができなかった方や県外にお住いの方などのために、番組の内容を一部編集した動画を公立大学法人福島県立医科大学の公式 YouTube チャンネルにアップロード・公開しました。公開後は、多くの方々に視聴いただいております。

※文中の役職はふくしま県民公開大学が開催された 2022 年３月当時のものです。